

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 14 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25285238

研究課題名(和文) 学校的社会化の現代的課題に関する総合的研究：<子ども理解>の制度化に着目して

研究課題名(英文) Studies on contemporary issues of "school socialization" : Focusing on the institutionalized way of understanding children

研究代表者

北澤 毅 (KITAZAWA, TAKESHI)

立教大学・文学部・教授

研究者番号：10224958

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,900,000円

研究成果の概要(和文)：我々の共同研究では、小さき存在が児童になる過程を「学校的社会化」と独自に概念化し、その過程の解明を目指してきている。その流れの中で本研究では、「子ども理解の制度化」というテーマを設定し、3つの研究プロジェクトを有機的に連関させながら推進した。第一に、教室場面での教師 - 児童の相互行為分析から「児童になる」過程の解明を目指した。第二に、戦前期の小学校における児童評価に関わる資料の分析を通して「児童観」の解明を目指した。そして第三に、広義の逸脱現象(いじめ、児童虐待、発達障害など)の分析を通して、「子ども理解」の特質を否定的側面から逆照射した。

研究成果の概要(英文)：We have been studying the "school socialization", which is our original concept for many years. This concept means the process where infants grow up to be elementary school students in modern Japanese society, since Meiji era. In this study, we especially focus on how the institutionalized way of understanding children has been developed from the point of social constructionism, which we regard children as not real existence but socially constructed in the process of teachers' daily practice of teaching and evaluating them.

Our research project consists of three empirical studies. We have video-taped and analyzed teacher-students interaction in everyday school life. We also collected historical school documents of pre 2th world war periods such as academic and other personal records from elementary schools. The last thing we focused on is the negative aspect of understanding children. We approached a case of bullying suicide and analyzed this case.

研究分野：教育社会学

キーワード：教育社会学 歴史社会学 相互行為分析 構築主義 学校的社会化 いじめ 児童 個性

1. 研究開始当初の背景

「小さき存在が児童になる」ことに着目する「学校的社会化」は、北澤が研究代表をつとめてきた基盤研究(C)(2007-2009、2010-2012)において使用し始めた概念である。この概念は、広い文脈では M.フーコーや Ph.アリエスらが提示した近代的な「教育」や「子ども」の成立の様相を今日的な事象としてとらえなおすものであり、2つのアプローチから研究を進めてきた。ひとつは現代の学校空間における教師-児童の授業場面の相互行為研究であり、もうひとつが日本における「児童」の成立過程を探究する歴史社会学研究であった。

こうした「学校的社会化」の歴史と現在を見通す研究を蓄積する中で、子ども理解の制度化という新たなテーマが浮かび上がってきた。子ども理解とは、所与として存在している「子どもの実体(性質や能力等)」を教師が見出し評価するような性質のものではない。それはむしろ、観察・評価といった日常的な教育実践によって達成されるものであり、その過程のなかで「子どもの実体」が構成されると考えられる。

以上を受けて本研究は、授業場面の相互行為研究と、学校における活動や児童・生徒理解の様式を規定する歴史性の探究を継続的に深めるとともに、その発展形態として子ども理解の制度化の解明という新たな研究課題を設定した。ここでいう子ども理解の制度化は、日常場面や歴史的局面はもとより、いじめや児童虐待などの社会問題のなかにも否定的な形で観察可能である。例えば、いじめ事件報道は否定的な意味での制度化された子ども理解の一形式といえるが、事件の現場に存在するはずの固有の現実を見ることなしに外部から批判するだけでは、いじめ問題解決への有効な手だては得られない。

2. 研究の目的

以上の背景を踏まえ、本研究では新たに「いじめ問題」を取り込むことで、より多角的な研究の推進を目指した。すなわち、(1)相互行為研究、(2)歴史社会学研究、(3)いじめ問題と生徒指導に関する研究の3つのアプローチである。これらは「現場の人々が行う理解の実践」を読み解くという基本姿勢において有機的連関をもつ。また、それぞれの研究は、子ども理解における「理解観」そのものの問い直しという共通の目的の下に組織された。以下、それぞれの研究の具体的な目的を示す。

(1) 学校授業場面の相互行為研究

小学1年生と6年生の授業場面を録画し、その映像データを分析するなかで、学校的社会化の様相と授業秩序の維持という現代的

課題を明らかにする。その際に着目するのは、児童が教師あるいは児童と相互行為するなかで獲得する「方法知」である。すなわち、小さき存在であった子どもが、「児童」となるための「方法知」(挙手や発言の仕方、ルール違反に対する謝罪の仕方など)を授業の相互行為場面においていかにして獲得していくのかを読み解くことで、学校的社会化のメカニズムを明らかにする。そして、そこで得られた知見を手がかりとして社会化の理論研究の深化を図る。

(2) 「児童観」の歴史社会学研究

「個性調査簿」を中心とする学校表簿のさらなる収集・分析により、「個性」概念の変容過程を明確にする。また、一次史料に残る家族や近隣の状況、父母の希望などの記述からは、家庭が学校的「児童理解」を実践する場へと変容する「家庭の学校化」を読み取ることが可能であり、家庭までを視野に入れた日本の「児童観」の成立と制度化の経緯を解明する。さらに、本研究では明治期に社会問題化した「児童虐待」をテーマに加える。これは、(3)のいじめ問題研究同様、問題視される社会現象にこそ制度化の過程や觀念の成立が際立ったかたちで観察できるという見通しによる。これにより、学齢児童を保護されるべき存在とみなし、労働から切り離すことで「児童」が成立する過程を明らかにする。

(3) いじめ問題と生徒指導に関する研究

現代の日本社会には、いじめをめぐる独特な言説が流通しているが、いじめを社会問題化する報道機関(新聞、テレビ、雑誌など)がいじめ言説を生産し、その言説を社会成員が受容し反復実践し、そうした動きをマスメディアが報じるという相互反映的な関係性が成立している。報道機関はいかなる現実を作り出しているのか、そして言説の対象となるいじめ当事者(被害者、加害者、学校関係者など)は、それぞれにいかなる現実を生きているのか。これこそが本研究の課題である。それゆえ、教師は子どものトラブルをどう理解し対処しているのか、生徒指導の現場でいじめという言葉はどのように使われているのか、いじめをめぐる報道言説(=支配的言説)と当事者の経験はいかに乖離しているのかといった問いに答えていくことで、生徒指導といじめ問題との関連性、いじめと自殺の結びつき方、いじめ隠蔽問題といった問題群に対して新たな視点を提示する。

以上の通り、本研究は小さき存在を児童として理解する実践の「歴史」と「現在」をより深く探究していくことに加え、子ども(児童/生徒)を理解する実践の「失敗」として議論される教育問題を検討することにより、学校的社会化の現代的課題について考察を行うものであった。こうした問題関心から、

本研究では、すでに収集してある膨大な映像データや歴史資料の継続的分析を進めると同時に、新たな史資料の収集を蓄積した。さらには、大津いじめ事件を中心としてマスメディアの報道内容を多角的に収集分析するとともに、事件の現場を生きる当事者たちの現実に接近するために、インタビュー調査をはじめとした現地調査を継続して実施した。これらの実証研究を積み重ねることで、それぞれの領域において新たな知見を提供し、社会化理論、言説理論、社会問題理論など、関連する理論研究の発展に寄与することを目指した。

3. 研究の方法

研究(1)では、「子ども」が「児童」になる局面を対象にして、エスノメソドロジー、会話分析、カテゴリー分析などの視点に依拠した相互行為分析を行った。具体的には、これまでの共同研究において収集した学校場面の映像データ、および新規に収集したデータを共同研究グループ全体で詳細に分析していくことで、仮説の生成とその検証作業を行った。それにより学校的社会化の実践のあり様を解明するとともに、そこで得られた知見を手がかりとして社会化理論(言語的社会化、身体の社会化、方法知の習得と実践など)の精緻化を目指した。

研究(2)では、継続課題である「児童」概念の成立過程の解明に加え、「子ども理解の制度化過程」を析出するために「個性調査簿」などの学校表簿に着目した。個性調査簿は、当時の教師が児童をどのように理解していたかを示す貴重な情報源であり、これまでも関東甲信、東北地方の小学校に保存されている表簿を収集し、データベース化と分析に取り組んできた。個性調査は省令や通達によって一律に開始されたものではないため、普及時期や項目、記述の様態が地域や学校によって異なる。それゆえ、全国的な実態を把握するために一次史料の収集対象地域を広げて調査を行った。同時に、明治期から始まる「児童虐待」問題の展開過程を丹念に検討することで、「児童」概念の成立過程の解明に接近することを企図した。

研究(3)では、<子ども理解>の失敗として語られる傾向のあるいじめ問題について、その議論の展開を強く方向づける各種メディア報道の詳細な分析を行った。その一方で、メディア報道の対象となる事件現場・教育現場を生きる当事者たち(被害者、加害者、学校関係者など)の現実に明らかにするため、当事者たちへのインタビュー調査を拡張して継続し、構築主義の視点からいじめ問題をめぐる多元的現実にアプローチした。メディアが作り上げるいじめ問題と、生徒や教師という教育現場を生きる人々の学校経験との乖離に着目し、「いじめと生徒指導」問題について新たな知見を提供するとともに、構築

主義をはじめとした社会問題理論の新たな展開可能性について検討した。

4. 研究成果

以下、各年度の研究成果を本課題の3つのアプローチ、(1)学校授業場面の相互行為研究、(2)「児童観」の歴史社会学研究、(3)いじめ問題と生徒指導に関する研究、の項目ごとに示す。

【平成25年度】

(1)平成24年度後半より関東圏内の公立小学校においてフィールドワークを開始し、授業場面の映像データの収集を行なった。収集した映像データのデータベース化に着手するとともに、複数の視点からの分析を行なった。具体的には、本共同研究が継続課題として掲げる「学校的社会化」の諸相を明らかにする試みとして、授業場面にみられる発話のインデックス性と「笑い」の発生に焦点を合わせ、教師・児童および児童間の非対称性に関する相互行為分析を進めた。

(2)明治・大正期に作成された学校表簿の分析により「個性」概念の変容過程を明確にし、家庭までを視野に入れた日本の「児童観」の成立と制度化の経緯について考察を進めた。は、大正期の教師たちが個性調査簿に記録された児童の「個性」を参照しながら、児童の「性格づけ」・「語り継ぎ」の実践を行っていたことを明らかにした。では、近代学校教育制度成立以降、しだいに家庭内に学校的な価値が入り込み、保護者が学校教育に適合するかたちで子どもの養育にあたるようになった要因を<家庭の学校化>の観点から考察を行なった。

(3)「大津いじめ自殺事件」を報じた新聞・雑誌・テレビが、「男子生徒の自殺はいじめ自殺であった」との「事実」をいかにして作り出してきたかを検討した。また、マスメディアの分析と並行して「当事者」(第三者調査委員会関係者、学校関係者、メディア関係者等)への聞き取り調査を継続して行なった。

【平成26年度】

(1)既に収集していた映像データの分析と新たに関東圏内の公立小学校においてフィールドワークを開始し、映像データの収集と観察記録の作成を行った。その成果として、授業場面において教師が一人の児童を児童集団から切り離し、再び集団に帰属させる実践や、教師が板書を用いて児童の視線を巧みにコントロールする方法を明らかにした。このほか、外国にルーツを持つ児童を学級に受け入れていく方法としての席替えの持つ意味を明らかにした。

(2)新聞記事の分析を通して日本の戦前期において児童虐待問題が構築されていく過程を明らかにし、子どもが「教育されるべき対象」とされていくことを解明した。また、

学制発布以降に国家・府県が制定した生徒心得・罰則を分析することを通して、学校における罰則の変容を示し、生徒集団を管理する教師の懲戒権力の成立過程を明らかにした。愛媛県での学校史料調査により、重要かつ大量の一次史料群を発見した。

(3)「大津いじめ自殺事件」に関するフィールドワーク、新聞記事やテレビ番組録画データ等の収集を継続して行うほかに、NHKアーカイブス学術利用トライアル研究へ参加することで得られた文字起こしデータ等をもとに分析が進められた。その成果として、「いじめ」が「いじめ苦」という感情経験と結びつき、「いじめ自殺」が最初に社会問題化する過程を明らかにした。それと同時にいじめ問題に巻き込まれていく当事者の経験の構造を解明した。

【平成 27 年度】

(1) 収集済みの映像データ分析、つくば市内の児童館、横浜市内の小学校におけるフィールドワークを実施した。その成果として、授業場面において逸脱的な振る舞いをする児童に対する教師の対応や、発達障害をめぐる教育実践の諸相を明らかにした。また、授業への「焦点化」や新任教員の語りに着目して、新任教員が抱える困難に対する教育臨床の社会的実践についての検討を行った。

(2) 愛媛県、高知県、長野県での学校史料調査を実施し、これまでに収集した学校表簿史料の記載項目一覧表を作成した。表簿名称、項目や様式の変遷、同一校における表簿の変化を追うことで、児童の個人性を把握する実践の歴史性を明らかにした。また、明治前期の教師用テキストであった「学校管理法書」中の記述から生徒へ罰を与える教師像の成立・変容過程を明らかにし、その変容要因として、表簿を用いて児童・生徒を理解しようとする観念の登場があったことを解明した。

(3)「大津いじめ自殺事件」に関するフィールドワークの実施に加え、収集したデータ等の整理・分析を進めた。その成果として、大津いじめ事件に関するテレビ報道において、<有識者>を「問題化装置」として位置づけ、大津いじめ事件が社会問題として構築される過程や、生徒指導という観点から学校におけるいじめ対応の課題を明らかにした。

【平成 28 年度】

(1) 収集済みの映像データ分析と、つくば市内の児童館におけるフィールドワークを実施した。その成果として、教師と児童の相互行為による学校秩序や授業の成立過程、発達障害児に対する学校での服薬管理への注視、児童館での支援実践、子どもの対人葛藤場面における保育者の指導実践、教員養成課程における「現場」体験の重要性について実証的に明らかにした。また、生徒間の相互行為や新任教員の困難の特徴を明らかにするための理論的、制度的な検討も行なった。

(2)「児童観」の成立過程を検討するための史料の分析とデータベース化作業を継続し、さらに埼玉県や茨城県における史料収集調査を実施した。その成果として、大正期小学校の評価に影響を与えた社会的要因、学校表簿史料を分析する方法とその意義、卒業式の変遷から見る感情教育の特徴、明治期から昭和戦前期における社会問題としての児童虐待の構築過程、近代公教育の成立過程における教育観や戦前期のボーイスカウトの指導観について明らかにした。

(3)「大津いじめ自殺事件」とそれに関連する「いじめ」事件のフィールドワーク、並びに資料収集と分析を行った。その成果として、ほぼ同時期に起きた大津いじめ自殺事件と高島市のいじめ事件における社会問題化過程の比較を通して、「いじめ」事件の事実認定と学校の責任について検討した。また、テレビ報道による大津いじめ自殺事件の構築過程や現実構成過程の実証的研究の方法と可能性を明らかにした。

【平成 29 年度】

(1) さいたま市内とつくば市内の小学校で観察とビデオ撮影調査を行い、授業場面における教師と児童の相互行為形式を分析することで児童的振る舞いの観察可能性を考察し、学術誌への論文掲載など着実な成果を上げた。また、幼保小の接続問題に関連して、幼保段階における初期学校的社会化の様相を解明するために、さいたま市内の幼稚園での観察とビデオ撮影調査を開始し、平成 30 年度も継続することが決定している。さらに、学校的社会化を逆照射するものとしての発達障害児の事例研究も継続的に実施しており、その成果の一部は学術論文として公刊した。

(2) 学校表簿の分析とデータベース化作業を継続し、「個性調査簿」データを基に大正期・昭和初期になされた児童への評価が人々の生活歴設計に影響をもちえたかを考察した。また、学校的社会化が促進された歴史的背景として教育勅語や学校儀式の問題、学校的社会化の浸透により顕在化した課題として、1930 年代の児童虐待問題などに取り組み、成果を上げた。

(3)「大津いじめ自殺事件」をはじめとした「いじめ問題」に関する新聞記事収集やテレビ報道の録画とともに、大津市事件関係者へのインタビュー調査を継続的に実施した。加えて、本事件の民事裁判の中で実施された 4 回におよぶ証人尋問すべてを傍聴し、詳細なフィールドノートを作成した。そして、これまでの継続調査から得られた多様なデータを多角的な視点から分析することで、中間報告的な性格を持つ研究成果報告書を平成 30 年 3 月末に公刊した。

5. 主な発表論文等(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 37 件)

北澤毅、構築主義研究と教育社会学 - 「言説」と「現実」をめぐる攻防 - 、社会学評論、査読無、第 68 巻 第 1 号、2017、38-54

有本真紀、卒業式と「感情の共同体」、子どもが主役になる社会科(千葉県歴史教育者協議会会誌) 第 48 号、査読無、2017、2-13

有本真紀、感情教育のかたち - 卒業式の変遷を通して - 、 α -Synodos、査読無、vol.215、2017、48-64

小野奈生子、児童 - 教師間相互行為にみる学級秩序 - 発話のインデックス性・相互反映性に着目して - 、立教大学教育学科研究年報、査読無、第 60 号、2017、121-131

高橋靖幸、子どもの対人葛藤場面における保育者のかかわり - 「実践の方法」に着目した保育と学生指導のあり方について - 、人間生活学研究、査読無、Vol.8、2017、89-100

高橋靖幸、教室における「規則の提示」の教育的意義 - 授業の社会的構成とカテゴリー化の実践 - 、人間生活学研究、査読無、第 8 巻、2017、103-113

越川葉子、「学校的社会化」の視角からみる保育の学校化 - 改定「指針」、改訂「要領」を読んで - 、季刊保育問題研究、査読無、第 286 号、2017、8-18

小野奈生子・山田鋭生、教員養成課程における「現場」体験の重要性について - 「ボランティア」「サービス・ラーニング」「学校インターンシップ」という観点から - 、共栄大学研究論集、査読無、第 15 号、2017、313-327

水谷智彦、大正期小学校の評価に影響を与えた社会的要因の探究 - 茨城県水海道地域の「個性調査簿」の計量分析 - 、立教大学教育学科研究年報、査読無、第 60 号、2017、147-170

鶴田真紀、日本近代公教育の成立過程における教育理念の変遷 - 教育観の質的変容の整理を中心に - 、創価大学教育学論集、査読無、第 68 号、2017、169-180

高橋靖幸、社会問題としての児童虐待の構築にみる「労働する子ども」 - 明治期から昭和戦前期にかけての「貰い子殺し」と「児童労働」の問題構築過程に着目して - 、立教大学教育学科研究年報、査読無、第 60 号、2017、133-146

越川葉子、「いじめ問題」にみる生徒間トラブルと学校の対応 - 教師が語るローカル・リアリティに着目して - 、教育社会学研究、査読有、第 101 集、2017、5-23

保坂克洋、発達障害児支援としての「予防的対応」 - 放課後児童クラブにおける相互行為に着目して - 、教育社会学研究、査読有、第 100 集、2017、285-304

有本真紀、「個性調査簿」による児童理解実践の様相 - 昭和初期以前の一次史料の

検討 - 、立教大学教育学科研究年報、査読無、第 59 号、2016、75-100

水谷智彦、生徒への罰からみる教師像の成立と変容 - 明治前期の「学校管理法書」に着目して - 、教育社会学研究、査読有、第 98 集、2016、177-196

間山広朗、学校におけるいじめ対応の課題 - 生徒指導上の「正論」再考 - 、中央評論、査読無、第 67 巻 1 号、2015、18-29

山田鋭生、「学級的事実」としての「学習」の達成 - 授業場面における<文の協働制作>の相互行為分析 - 、子ども社会研究、査読有、第 21 号、2015、151-163

稲葉浩一、「探究的学習における教育方法」について - 「児童生徒の知的関心」の再検討をもとに - 、尚絅大学研究紀要 A.人文・社会科学編、査読有、第 47 号、2015、89-106

越川葉子、逸脱者を集団の一員とみなす日常の実践形式について - 「児童」集団からの<切り離し>と<再帰属>に着目して - 、秋草学園短期大学紀要、査読有、第 31 号、2015、117-130

水谷智彦、教師の懲戒権規定の前史 - 小学生生徒心得・罰則の変化に着目して - 、立教大学教育学科研究年報、査読無、第 58 号、2015、141-158

②1 有本真紀、日本近代における<家庭の学校化> - 家庭の管理装置としての学校教育 - 明治期・大正期における「学校と家庭との連携」 - 、立教大学教育学科研究年報、査読無、第 57 号、2014、5-26

②2 白松賢・久保田真功・間山広朗、逸脱から教育問題へ - 実証主義・当事者・社会的構成論 - 、教育社会学研究、査読無、第 95 集、2014、207-250

②3 鶴田真紀、社会的視点からの発達障害 - 特別支援教育をめぐる社会学的考察の試み - 、貞静学園短期大学研究紀要、査読無、第 5 号、2014、41-51

②4 水谷智彦、日本近代における<家庭の学校化> - <教育>を志向する家族の形成 - 大正期茨城県水海道地域における「家庭調査」を手がかりに - 、立教大学教育学科研究年報、査読無、第 57 号、2014、27-47

②5 稲葉浩一、記録される「個性」 - 言説・解釈実践としての児童理解の分析 - 、教育社会学研究、査読有、第 93 集、2013、91-115

〔学会発表〕(計 30 件)

有本真紀、教育勅語と唱歌 - 儀式による共存関係を中心に - 、日本教育学会公開シンポジウム「教育勅語問題を考える」(招待講演)、2017

越川葉子、「いじめ」事件の事実認定と学校の責任問題、日本教育デザイン学会(第 68 回イノベティブ・セミナー)(招待講演)、2017

有本真紀、卒業式と「感情の共同体」(記念講演)、第 50 回千葉県歴史教育研究集会(招待講演)、2017 年

間山広朗、テレビの現実構成をめぐる実証研究の展開 - 「大津いじめ自殺」問題を中心に - 、日本教育社会学会第 68 回大会(大会課題研究部会報告) 2016

Maki Tsuruta , Was medicine taken? The function of the category 'medicine' and social construction of ADHD in schools , Oxford Ethnography and Education Conference , 2015 年

北澤毅、「いじめ問題」の解決とは何か - 「いじめ」をなくすことと「いじめ自殺」をなくすこと - 、愛媛大学教育学部研究助成「いじめ問題のこれからを展望する」(招待講演) 2014

間山広朗、いじめをめぐる概念的問題と記述の政治学の課題、日本教育社会学会第 65 回大会、2013

〔図書〕(計 8 件)

北澤毅(研究代表者)、いじめ問題の解読 - 混迷からの脱却を目指す実証研究:平成 25~29 年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書、2018(140)、間山広朗、大津いじめ自殺問題過熱報道の再構成 - 集合としてのテレビ報道の観点から(1-12)、間山広朗、大津いじめ自殺問題テレビ報道場面の分析可能性 - 報道と視聴者の相互行為的関係(13-23)、稲葉浩一、「大津市いじめ事件」の経験のされかた - 社会問題化における有識者の用いられ方に着目して(24-45)、越川葉子、地方紙は何を報じていたのか - 京都新聞の報道からみた大津市事件(46-59)、今井聖、いじめ事件と「学校責任」の社会的構成 - 「大津いじめ事件」言説における市長の役割に着目して(60-72)、今井聖、いじめ事件における事実認定と法的責任 - 「大津いじめ事件」をめぐる第三者委員会調査と裁判の記述(73-83)、越川葉子、「いじめ問題」にみる生徒間トラブルと学校の対応 - 教師が語るローカル・リアリティに着目して(84-93)、保坂克洋、いじめ自殺事件の「解決」とは - 被害者遺族の経験に着目して(94-99)、粕谷圭佑、アメリカ合衆国における「いじめ」問題 - bullying 対策法とフィービー・プリンス事件報道に着目して(100-113)、高嶋江、いじめ施策の変遷 - 公的文書にみるいじめ観に着目して(114-120)、北澤毅、「いじめ問題」の解剖学(教育新聞連載原稿:2015 年 4 月~2017 年 2 月)(121-140)

日本教育社会学会編『教育社会学事典』、丸善出版、2018(883)、間山広朗、教育言説(126-127)、北澤毅・白松賢、概説:質的調査(202-207)、鶴田真紀、映像データ分析(232-233)、小野奈生子、感情労働(256-257)、有本真紀、学校教育が生み出す共同性(390-391)、北澤毅・山田哲也、概説:教育問題への社会学的アプローチ(538-543)、北澤毅、逸脱(544-547)

有本真紀、世織書房、教育勅語と学校教育 - 教育勅語の教材使用問題をどう考えるか - 、第一部第二章 学校儀式と身体 - 教育勅語と唱歌の共存関係を中心に - 、2018、283(74-94)

北澤毅、岩波書店、教育社会学のフロンティア 1 - 学問としての展開と課題 - 、第 6 章、教育社会学研究における質的研究の展開 - 質的研究における一般化問題を考えるために、2017、320(127-144)

北澤毅、世界思想社、「いじめ自殺」の社会学 - 「いじめ問題」を脱構築する - 、2015、268

鶴田真紀、障害児教育の社会学 - 発達障害をめぐる教育実践の社会学的研究 - 、博士学位論文、2015、175

一般社団法人社会調査協会編『社会調査事典』、丸善出版、2014(892)、北澤毅、質的調査の方法:概論(274-279)、間山広朗、教育問題:教育問題への質的アプローチ(436-437)

日本子ども社会学会研究刊行委員会編『子ども問題事典』、ハーベスト社、2013(255)、高橋靖幸・古賀正義、格差社会と深刻化する犯罪 - アメリカ - (170-171)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

北澤 毅 (KITAZAWA Takeshi)
立教大学・文学部・教授
研究者番号:10224958

(2) 研究分担者

有本 真紀 (ARIMOTO Maki)
立教大学・文学部・教授
研究者番号:10251597

間山 広朗 (MAYAMA Hiroo)
神奈川大学・人間科学部・教授
研究者番号:50386489

(3) 連携研究者

紅林 伸幸 (KUREBAYASHI Nobuyuki)
常葉大学大学院・初等教育高度実践研究科・教授
研究者番号:40262068

鶴田 真紀 (TSURUTA Maki)
創価大学・教育学部・准教授
研究者番号:60554269